



Title	一般の日本人は外国人の日本語をどのように評価するか
Author(s)	原田, 明子
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 2, 157-168
Issue Date	1998-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45569
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC002_012.pdf



一般の日本人は外国人の日本語を どのように評価するか¹⁾

原 田 明 子

要 旨

近年、外国語教育の目的はコミュニケーション能力、特に口頭表現能力を身につけることに置かれるようになってきた。初期の段階からこの口頭表現能力をつけさせるために、日本語研修コースでは会話で教えるべき項目の抽出と会話シラバスの構築を行い、その教材化を進めている。更にロールカード²⁾を作成し、これを用いて会話の授業を行い、口頭能力試験にも取り入れている。しかし、一連の教材化の作業や試験の評価の基準は日本語教師の内省にのみ委ねられており、一般の日本人による視点・評価が反映されていないのではないかとの思いから、今回、一般の日本人は外国人の日本語をどのように評価するかについて調査をした。具体的には、研修コースの6人の学生のロールプレイをビデオに撮り、それを一般の日本人2人に見せて、どんな点に注目するのか、またどんな要素がプラス、或いはマイナスの評価につながるのかを調べた。

その結果、1) 一般の日本人は学習者の悪かった点よりも良かった点に目を向ける傾向があること、2) 「文法・語彙の正確さ」といった言語規則に関する要素より、あいづちや問い返し、話の切り出し方などの円滑なコミュニケーションの遂行に関する要素に注目していること、3) 半分強のコメントが同一の項目であることから、評価の対象になりやすい項目があること、などがわかった。

以上のことから、学習者のパフォーマンスのどこに注目するのかは各要素ごとに独立して決まるものではなく、互いに関連性を持つと考えられるので、目につきやすい項目の抽出とそれらの相互関係の記述が今後の課題として示唆される。

〔キーワード〕 ロールプレイ、口頭能力、一般日本人による評価、会話授業のシラバス

1. はじめに

日本語学習者の会話能力を伸ばすためには、文法と同様に授業の内容やシラバスを整備し、定期的に会話の運用能力を測り、それらを適切にフィードバックする必要がある。会話授業のシラバスには、いわゆる言語項目だけでなく、あいづち、問い返し、会話の進め方など、円滑なコミュニケーションを支える様々な要素を取り込んでいかなければならない。特に、初級の段階においては、シラバスはコミュニケーション上重要なものから順に配列される必要があるだろう。北海道大学の日本語研修コースでは、このような観点から会話授業で教えるべき項目の抽出とシラバスの構築を行い、その教材化を試みている。(小池ら1997)

しかし、これらの作業はいずれも日本語教師の内省に拠っており、日本語教師ではない一般の日本人³⁾による評価を忠実に反映していない可能性がある。会話では、最終的には一般の日本人と自然にコミュニケーションできることが学習者にとって大切であり、そのためには日本語の文法や構造を体系的に捉え、それを客観視して専門に教えている日本語教師の評価だけでは片寄りがあるのではないだろうかと考えた。日々、学習者と接している日本語教師の場合は、学習者の間違いに対して敏感になり過ぎたり、反対にどこなとところで間違うのか、なぜそういった間違いをしてしまうのかが分かるため、許容度が大きくなったりすることも考えられる。そこで一般の日本人に外国人の会話を聞いてもらい、どんな印象を持つか、どのような点に注目するのか、またどのような要素がプラス、或いはマイナス評価につながるのかを調査し、両者の相違点や共通点を調べ、会話のシラバス構築、及び口頭能力試験として行っているインタビューやロールプレイの評価基準にそれらを反映して行こうと考えた。本稿ではその結果を報告し、考察をする。

2. 用語の定義

本稿で使う用語を次のように定義する。

1) コミュニケーション能力：Canale & Swain の提唱するような言語技能全てにかかわる包括的な能力を指す。すなわち、①文法能力②社会言語学的能力③談話能力④ストラテジー能力を含むものをいう。

2) 会話のストラテジー：コミュニケーションを円滑に進めて行くストラテジーを指す。例えばあいづち、聞き返し、確認、会話の切り出し・切り

上げなどをいう。

3. 調査の概要

本研究は、一般の日本人が外国人の日本語に接したときにどのような評価するかを調べるための、パイロットスタディである。この分野での先行研究には、専門教官による留学生の会話能力の評価の調査（深尾百合子 1996）や断り、要求という 2 つの言語行為を通しての学習者の発話に対する母語話者の印象（西郷英樹 1997）があるが、一般の日本人が学習者の日本語のどんな点に注目し、どう評価するのかといった研究はまだ少ない。そこで、まずどんな質問項目を設け、どういった方法で調査をすれば有効なのかを調べようと考えた。更に、アンケートや質問を決める場合、その中で用いる用語の問題も重要であると考えた。例えば、「あの人、発音がよくない」と言ったとき、この「発音」は何を指しているのか。単音レベルのことなのか、イントネーションやアクセント、プロミネンスまでも含んだものなのかといった問題である。そこで、今回は調査の対象を 2 人に絞り、感じた印象を自由に語ってもらうという方法を選んだ。そして評価に使われる用語や質問項目の信頼性、妥当性までも考慮に入れた調査を行った。資料には、インタビューテストでのロールプレイをビデオ撮りしたものを使用した。

3.1 使用したロールプレイ

ロールプレイはタスクにより難易度に差が出ないように考慮して用意した次の 3 種類を使用した。学生はこの中から 1 枚を選び、ロールプレイを行った。相手は全て教師がつとめた。

- a. 学生が主催するパーティーに先生を誘う。
- b. 宿題の締め切りは今日までだが、まだ終わっていない。そのことを先生に謝り、提出期限を延ばしてもらう。
- c. ホームステイをした日本の家族に日本語でお礼の手紙を書いた。そのチェックを先生に頼む。

3.2 対象学習者

調査の対象をとした学習者は、1997年10月から1998年3月までの6カ月間、北海道大学の日本語研修コースに在籍していた大学院研究留学生6名

である。日本語学習歴は、ゼロ、又はほとんどゼロの学生である。調査の時期はコース第12週目（約360時間終了）で、性別及び国籍、選んだロールカードは表1のとおりである。

学習者	性別	国籍	母語	ロールカード
A	男	シリア	アラビア語	b
B	女	ブラジル	ポルトガル語	c
C	女	ミャンマー	ビルマ語	c
D	女	ロシア	ロシア語	a
E	男	マレーシア	マレー語	a
F	女	ミャンマー	ビルマ語	a

表1

3.3 評価を依頼した日本人

上記のビデオ撮りしたロールプレイを2名の日本人H, K（以下JH, JKと記す）に見せて評価してもらった。JH, JKはそれぞれ30代、40代の主婦で、教師としての経験、及び日本語教育とのかかわりを持った経験はゼロである。また、外国人に接したこともほとんどない。今回の調査の目的から、細かい質問のやり取りができる人として選んだ。

3.4 調査の手順

調査は、次のような手順で行った。

- 1) 事前に、これはテスト場面であること、カードを使ったロールプレイであること、相手は全て先生が行っていること、を伝えた。
- 2) 画像を消し、音声だけのVTRを一人ずつ聞いてもらい、その都度VTRを止めて自由に印象を自分の言葉で語ってもらった。そして最後に、上手だと思う順に順番をつけてもらった。
- 3) 次に画像付きビデオを見せ、2)と同様の手順で行った。
- 4) このやり取りをテープに録音し、文字化した。

4. 項目の分類

JH, JKに学習者のロールプレイを見てもらい、得られたコメントを、

まずプラス評価とマイナス評価に分類し、さらにそれらを項目別に分けた。
以下はその項目の分類の例である。

① 学習者Fのロールプレイ

F: すみません、先生、あしたは、あしたは、あしたは、土曜日。^{A)} (T: はい、土曜日です。) はい、土曜日です。(はい。) わたしは、会館でパーティーがいらっしやいます。(はい) いらっしやいます、いらっしやいます。(パーティーですか。) はい、パーティーです。うー それから、先生、めしあげます。(何を) うー 6 時、午後 6 時、6 時からー。(6 時からあるんですか。) ^{B)} はい。

下線部^{A)} に対し、「この会話の始め方は、とても唐突な感じを受ける。」
『すみません、先生』は、謝っているか、何かを頼むときならいいが、ここではで不自然。」(J K) また点線部^{B)} に対しては、「何回かのやり取りの後にわかるけど、聞き流したら何を言っているのかわからない。相手が聞き取ってあげてる感じ。」「内容がとてもつかみづらい。誘っているとは思えない。」(J H) と言っている。

⇒^{A)} に対するコメントから、〈話を自然に切り出せない〉^{B)} に対するコメントから、〈話の流れを自分で作れない〉という項目をたてた。

② 学習者Aのロールプレイ

A: あー、先生。(T: はい。) わたしのしゅくだいー宿題はーまだ終わって、まだ終わっていません。(あっ、どうしたんですか。今日、しめきりですよ。) あー、すみません。(一ん) あの、あー先週んーはえーかぜをー風邪をひいていました。

③ 学習者Bのロールプレイ

B: 先生、こんにちは。(T: はい、こんにちは。) えー暇ですか。(いま) はい。(えー何かしら。) あーこれは私の書いた手紙です。えー (日本語で?) はい、日本語 はい、全部日本語です。(あ、ほんと。) はい、チェックをお願いします。

④ 学習者Cのロールプレイ

C: 先生。(T: あ、はい。) 冬休みに (ええ。) わたしはー私は冬休みにーホームステイにーんーしました。(あ、そう。) 日本の家族にいっしょに……一週間、うん住んでいました。(あ、そうですか。)

上記 3 人の会話の切り出しに対して、「この人は自然な感じで会話を始

めている。」「聞いていてスムーズな感じがした。」「テンポよく、会話が始まっている。」「日本語として耳障りでなく、ひっきりなくスーッと入ってくる。」「(J K)と言っている。

⇒これらのコメントから、〈話を自然に切り出せる〉という項目をたてた。

⑤ 学習者Eのロールプレイ

E：…あー先生は、お酒を召し上がりますか。(T：はい、飲みます。) はい、あー 大丈夫、あー (お酒がありますか。) あ、おーたくさん、たくさん、(たくさん、おーそれはいい。) あの一けいてき寮の学生は毎日たくさんお酒を飲みます。(それは、いいこと、あーそうですか。) からの一料理は食べません、あつ、食べますか。

これに対して「会話がかみ合っているというか、作れている。」「(J K)」「何回かの言い直しの中で、コミュニケーションがとれている。」「(J H)と言っている。

⇒これらのコメントから〈話の流れを自分で作れる〉という項目をたてた。

このようにしてJ H, J Kのコメントをもとに項目を立てて分類し、更にそれらを文法・語彙、会話のストラテジー、話し方、聞き取り、非言語の5つにカテゴライズした。これを表にまとめたものが、次の表2と表3である。

5. 結果及び考察

5.1 全体の傾向

J H, J Kから得られたコメントの総数は83で、このうちプラス評価は54、マイナス評価は29であった。即ち、プラス評価がマイナス評価のはほぼ2倍得られたことになる。この割合は、J H, J Kに共通している。このことから、一般の日本人は学習者の悪かった点より良かった点に目を向ける傾向があることが推測される。日本語研修コースの口頭能力試験では、「ハイと言うべき場面でウンと言った」「誘っていることが相手に伝わらなかった」というように、学習者のパフォーマンスが、その時点時点で要求されるレベルにどれだけ達していないかという点に注目して、減点法による評価を行っている。つまり、それまでの学習項目を100%消化していれば、初級レベルであっても満点が与えられる。これに対して当然のことながら、一般の日本人はその時点で要求されるレベルを持っていない。しかし、日本語の母語話者を基準とした減点法ではなく、良かった点に目

〈プラス評価〉

〈マイナス評価〉

学 習 者				項 目	カテゴリー	項 目	学 習 者					
計	A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F
6/3	○● ○	○● ○	○		○●	語彙が分かっている 会話表現をうまく使う	文法/語彙	●	○	●	○	○● ○
9/8	● ○● ○	○ ○			○● ●	あいづちをうつ 考えているサインを出す 確認している 話を自然に切り出せる 聞き返しができる 話の流れを自分で作れる	会話の ストラ テジー	○		●	○	
6/10	● ○● ○●	○● ○● ○●	○	○	● ● ○	リズムよく話す ゆっくり話す 発音がいい 間のとり方がいい	話し方		●		○● ○	●
5/3	○● ○	○● ○	○	○	○● ○●	聞き取りができる 表情がにこやか	聞き取り 非言語		●			○●
3/1		○		○	○●	表情がない、硬い 目線が下にある		●				
29/25	6/6	9/5	6/0	2/4	4/10	2/0	小計 H/K					
54	12	14	6	6	14	2	合 計					
							6	1	3	3	5	11
							2/4	1/0	0/3	2/1	4/1	6/5
												15/14
												29

表 2

○：H、●：K

を向ける、いわば加点法で学習者のパフォーマンスを捉えた点に注目したいと思う。

また、JH、JKから得られたコメントの総数はそれぞれ39、44で、このうち17が同一項目に関するコメントであり、異なる項目に関するコメントのほうが多く、それぞれ22、27であった。これは、一方はそれについて意識化がなされたが他方はされなかったという可能性も考えられるが、評価の対象になりやすい項目に関しては早い段階から積極的にシラバスに取り込む必要があると思われる。

5.2 文法、語彙

このカテゴリーでは、プラス評価で9、マイナス評価で7のコメントが得られた。項目で見ると、語彙が分かっているかどうかについてのコメントが多かった。初級のレベルでは語彙を知っているかどうかが会話を成立させる大きな要因になっているからだろう。語彙としては知っているが適切に使えなかった例として、JKは学習者Bの「ひまですか」を挙げた。先生に手紙のチェックを頼むロールプレイの会話の切り出しに使われているのだが、普通の日本人は目上の人に何か頼むとき、「ひまですか」とは言わず、代わりに「お時間がありますか」「今ちょっと、よろしいですか。」といった表現を使う。その他にも「だいじょうぶ」、「おねがいします」等、日常よく使うが意味領域や使い方に注意が必要な語に関しては、単に対訳を与えるだけではなく、どんな場面でどんな使い方をするかを文脈の中で教えていくべきだろう。

また、「意味が分かれば、文法が間違っているでもそれほど気にならない。」「誰が何をどうしたかがちゃんとしていれば日本語は通じる。今のところは助詞とか間違ったり抜けたりしていても、習いたての日本語だって思うから、ちょっと間違っているでも大丈夫。」(JH)などのコメントからわかるように、初級のレベルにおいては、言っていることが分かって会話が成立していれば他の間違いには寛容になり、マイナスに評価されることが少ないと推測される。しかし、学習者の言語レベルが高くなり、ある一定のレベルを越えると、間違いや不自然さに対する寛容度が低くなるとも考えられる。コミュニケーションとは、お互いが協力し合い共通性を見いだし、築いていく相互補完的作業であるから、それがどんな言語レベルで行われるかはお互いが相手の言語レベルをどう認識するかによって決まるだろう。

う。従って、学習者の言語レベルが高くなればそれに応じて相手の要求するレベルも高くなり、学習者の日本語がそのレベルに見合っていなかった場合、評価が低くなる可能性がある。学習者の日本語のレベルがどの程度になると寛容度が低くなるのかは、これからの調査に期待したい。

5.3 会話のストラテジー

文法、語彙の正確さといった言語規則に関するコメントより、会話のストラテジーに関するコメントが多く、その傾向はプラス評価において顕著だった。あいづち、聞き返し、確認、会話の切りだし・切り上げといったコミュニケーションを円滑に進めて行くストラテジーが適切に使えていると、会話全体にプラスの印象をもたらすと考えられる。それは、「滑らかで、聞いていて落ち着く」「文にかたさがいいから、流暢に聞こえる」(JK)「分からなかったら、『もう一度言ってください』と言っているのは良い」(JH)等のコメントに表れているだろう。

また、上の結果は、会話授業のシラバスとして、いわゆる言語項目に関する要素以外のものを積極的に組み込んでいる本コースの教材の有効性を裏付けるものだろう。

5.4 話し方

話し方のプラス評価は16、マイナス評価は5だった。プラス評価の中では、リズムよく話すや発音がいい、といった項目が多かった。また、同一の項目であっても、正反対に評価されることがあることが分かった。具体的には、Cの話し方について、JKは「ゆっくり話していてよい」というプラスの評価をしたのに対し、JHは「途切れ途切れに話すのでよくない」とマイナス評価を与えた。このように、人によって評価が分かれる項目は、その項目の学習者へのフィードバックを慎重にしなければならないだろう。今後は、そういった項目を拾い集めて、評価の方法を検討して行くことも考えて行かなければならない。

5.5 聞き取り、非言語

聞き取りに関しては、JH、JKとも同じような評価をしている。相手の言ったことが聞き取れて理解できているかどうかは判断しやすく、人によって評価に差が出にくい項目である可能性がある。

表情や目線など非言語要素への注目は、特にプラス評価において顕著だった。「笑顔がないと話していて不安になる。」「相手を見て、にこやかで明るい表情で話すので、こちらも引き込まれる。」(JK)などのコメントがあった。非言語要素はコミュニケーションを行う上で、言語要素とともに大切な要素であるが、言語表現の習得に集中したほうがいいと思われる初期の段階ではなく、少し慣れてから時期をみて教え始める方法もあるだろう。

6. 今後の課題

今回の調査は前にも述べたように、言わばパイロットスタディであり、この結果を今後の調査で使用するべき質問項目や有効な調査方法に役立てて行きたいと考えている。また、注目する点や評価についての一般的な傾向を知るために、このような調査を年齢、性別、出身地、学歴、社会的地位、資質⁴⁾などの異なる様々な人々に対して行い、数多くのデータを集めて分析をしていくことも必要だろう。そして、一般の日本人がどのように学習者の日本語を評価しているのかを、分かりやすく学習者にフィードバックすることも大切だと考えている。

更に、調査方法に関しては、ビデオを見せる順番をどうするかという問題がある。あまり上手ではない学習者の後に見る場合と上手な学習者の後にみる場合では、同じ学習者のロールプレイでも評価が異なる可能性がある。また、ロールプレイを見ていくうちに評価する日本人が外国人の日本語に慣れていく、或いは、評価するテクニックを身につけていく、といったことも考えられる。これらは、調査結果のデータとしての正確さを高めるために考慮して行かなければならない問題である。

会話シラバスの構築に関しては、プラス評価であれ、マイナス評価であれ、評価の対象になりやすい項目は初期の段階から会話のシラバスに取り込む事が肝要であろう。しかし、学習者のパフォーマンスのどこに目がいくかは各要素ごとに独立して決まるものではなく、お互いに関連し合っているものであると思われる。従って、どんな項目が目につきやすいのか、その要素を抽出すること、及び、それらの要素の相互関係の記述をしていくことが今後の課題である。

注：

- 1) 本稿は、1998年3月に東京農工大において行われた日本語教育方法研究会にて発表した内容に修正、加筆したものである。
- 2) ここでいうロールカードには、状況説明とタスクだけが記されており、文型や語彙などの指示は一切ない。コースでの文法の授業や会話のテキストから学んだ事柄から、学生がその場にあったものを自分で選んで会話を作ることを目的としている。
- 3) 一般の日本人とは、日本語の母語話者で日本語教育を専門としていない人を指す。日本語母語話者とは、大抵の場合日本語の文を間違いなく作り出すことができる、日本語のシステムに関して明示的、非明示的な知識を持った人を言う。
- 4) 例えば、作家、詩人のように言語及び言語の使い方について敏感で神経質な人もいるし、また反対に全く無関心な人もいる。

参考文献：

- 深尾百合子（1996）「工学部専門教官による留学生の会話能力評価」『平成8年度日本語教育学会秋季大会予稿集』
- 西郷英樹（1997）「日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の印象－断りと要求という2つの言語行為を通して－」『平成10年度日本語教育学会春季大会予稿集』
- 小池真理・小林ミナ（1997）「初級レベルの会話教材の開発」『日本語教育方法研究会誌』Vol.4, No.1
- 小池真理・原田明子・小林ミナ（1998）「学習者の会話能力に対する評価にみられる日本語教師と一般日本人のずれ」『日本語教育方法研究誌』Vol.5, No.1
- Canale. M. & Swain. M. (1980) “Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing” *Applied Linguistics* vol. 1

はらだ あきこ（留学生センター非常勤講師）

How do ordinary Japanese speakers evaluate learners' Japanese ?

HARADA Akiko

In the Japanese intensive course at Hokkaido University, we have been developing conversation materials for beginners, with role-play being used as a test of conversational ability. However, both the materials and the evaluation of this test are based solely on the viewpoints of Japanese language teachers, and it is possible that these do not reflect the viewpoints of ordinary Japanese speakers.

In this study, we showed video recordings of six role-plays to two Japanese native speakers and asked them what points of learners' performance particularly caught their attention.

As a result, we found that Japanese native speakers tended to pay attention to (1) good points rather than bad points of learners' Japanese, and (2) conversational strategies such as aizuchi, and opening and closing devices, rather than the accurate use of grammar or vocabulary.